

第42回

全道医家囲碁大会

名人戦は樋口栄作 6 段格が 3 連覇（通算 4 度目）！
本因坊戦は菊地一也 4 段が初優勝！

第42回全道医家囲碁大会を終えて

全道医家囲碁連盟

監事 大泉 和夫



平成27年11月15日(日)、今年も昨年と同じ様な穏やかな日和に恵まれ第42回大会が札幌市医師会館で開催されました。ほとんどがいつもの顔ぶれで人数も昨年とあまり変わらず、名人戦参加者14名、本因坊戦参加者8名と計22名でした。

本大会の名人戦には常に参加され中心的存在であった高橋成夫先生が病にて一昨年12月10日に逝去され大物がまた一人去って行きました。私は、高橋先生とは同期で夕張の炭鉱病院でインターン生活を共にした中で、ここで囲碁を覚え1から指導を受けた大恩人です。心より御冥福をお祈り申し上げます。

名人戦はトーナメントを加味した順位戦、本因坊戦は変則リーグ方式で、全員4回戦で、力戦につぐ力戦を勝ち上り優勝されたのは、名人戦は樋口栄作先生、本因坊戦は菊地一也先生でした。樋口先生は今回で3期連続、通算4度の優勝で、その群を抜く強さは何と表現すればよいのか一言では言い表わせないものがあります。菊地先生は初優勝でお二人とも本当におめでとうございます。

囲碁に向き合う際の心得を説いた囲碁十訣の中の一カ条の「捨小就大」は私の好きな言葉です。古代中国、唐の時代の劉仲甫の作と云われていますが、「目先の利に捕われず常に大局を見よ」は囲碁の世界に限ったものではなく、この姿勢を心の拠り所として対局したいものです。

懇親会の席での最初の一杯は大会の疲れが癒される最高の一瞬です。今回、所要のため長瀬北海道医師会会長は欠席で、三宅会長の御挨拶があり、南田副会長の司会により、名人戦・本因坊戦の表彰式が行われ、入賞者への賞状、トロフィー、副賞の授与、ラッキー賞の抽選もあり、次に恒例の上村プロ棋士による名人戦決勝戦の大盤解説と大いに会は盛り上がり和気あいあいの中に終了致しました。

今回不本意にも充分力を発揮することのできな

った先生には、捲土重来、来年を期して御活躍されます様、期待致しております。

最後に、毎年本大会に御支援御協力をいただいております北海道医師会、メディコ北海道、損保ジャパン日本興亜、札幌市医師会各位には深く感謝申し上げます。

そして、休日にもかかわらず会の進行に御盡力いただいた道医師会事務局の皆様にも厚くお礼申し上げます。

追記

事務局のデータによりますと25年前の17回大会の参加者は58名だったと聞いております。特に本因坊戦の参加者が多く、A組(5~4段)、B組(3~2段)の二組に編成された時期がありました。以後漸減の傾向にあり37回大会からは本因坊戦は一組となりました。

役員会においても取り上げられ道医師会会員以外の先生方への参加呼びかけ、知人に愛好者がいれば勧誘と試みてみたもののあまり効果は上がっておりません。

会の発展継続のため、一人でも多くの参加を期待致しております。

第42回名人戦優勝記

札幌市医師会

ひぐち耳鼻咽喉科

樋口 栄作



この度、第42回全道医家囲碁大会名人戦に優勝することができ、大変うれしく思います。今年は思うように準備ができず、勝てるかどうか不安もありましたが、第40回大会からの連続優勝を3（通算4回）に伸ばすことができホッとしております。当日は、対局前に目を通した囲碁の本の中に、徒然草の中で吉田兼好が詠んだ、「勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり」という歌を見つけ、心に留めて一日の対局に臨みました。1回戦がシードとなり、2回戦からの対局は、南田英俊先生、石川順一先生、そして決勝戦の土屋潔先生と、どれも激しい戦いの基になりました。以下は決勝戦の解説です。

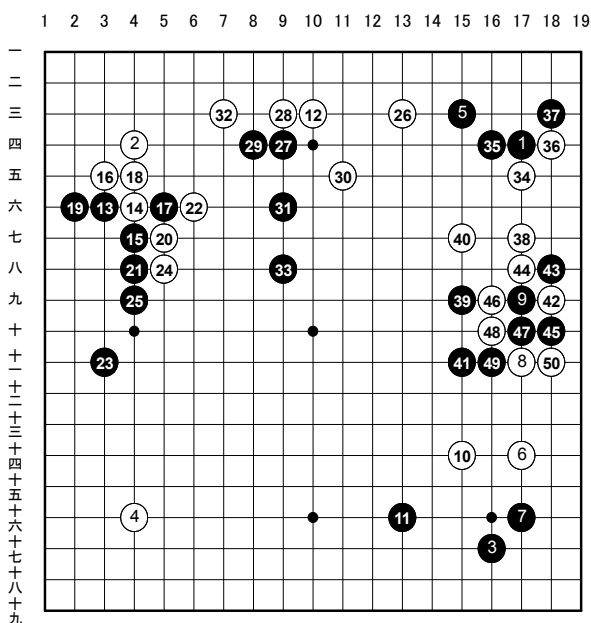
<第1譜 (1-50)>

白番の私は2連星で、黒5のシマリを受けて、白6と二間にかかりました。黒7とコスンで白12までゆっくりした布石は、白の狙い通りです。ここで黒13の小ゲイマガカリに対し白14とツケオサエたのは、左上隅を厚くして白26に開こうという白の思惑でした。黒23では惜しまず5の八(白24)のアテを利かしてから、3の十四とカカリ、左辺に広く展開するのも有力でした。黒23に対しすかさず白24のオシを利かして白26と右辺に展開し、白の注文が通りました。黒27とすぐに消してきましたが、あるいはこの消しが疑問だったかもしれません。黒33まで黒は上辺に弱い一団を作っていました。白は上辺の黒を睨みながら、白34のツケから右辺に手を付け、黒9の一子を攻めます。途中黒41は疑問でした。白42のツケが機敏で、黒43以下黒が分断され、眼二つで右辺に黒を封じ込まれてしまい、白が一本取った形です。

<第2譜 (51-100)>

白62のボウシで右辺の黒の種石を厳しく攻めます。黒65に対し白66では、15の十(黒81)と種石の二目を取って右辺の二分された白石の安全を図りつつ、黒への攻めを続行する方が無難でしたが、実戦では白66とまだはっきりと生きていない右上隅の黒の一団にツケて様子を見ました。この後白80まで右上隅の黒の眼形がなくなりこの一団も怪しくなってきました。黒81は勝負手です。種石を助け、逆に右辺の二分された白への攻めを狙っています。これに対し、白82のカケが厳しい返し技でした。黒87までの抵抗に白88とつないだのが冷静で、黒89と戻らざるを得ず、白90の抜きに黒91と右上隅を生きなければならぬのが黒のつらいところでした。先手を取

<第1譜 1-50> 黒：土屋、白：樋口

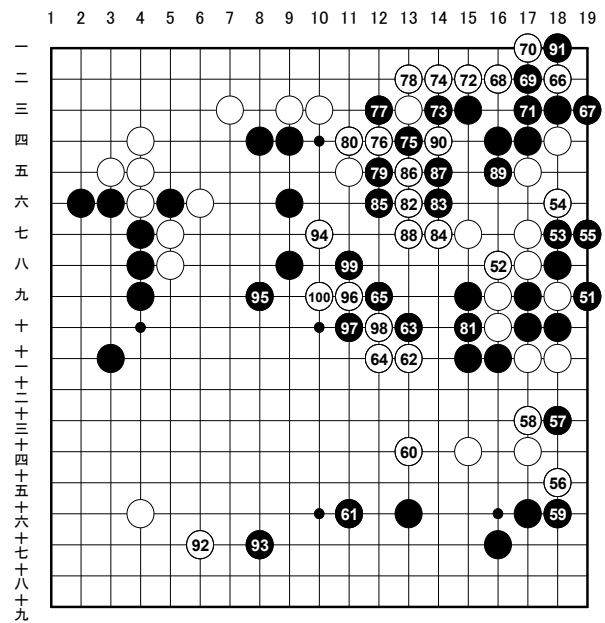


った白は、白92の後、白94、96と右辺と上辺の黒をカラミ攻めにして好調です。

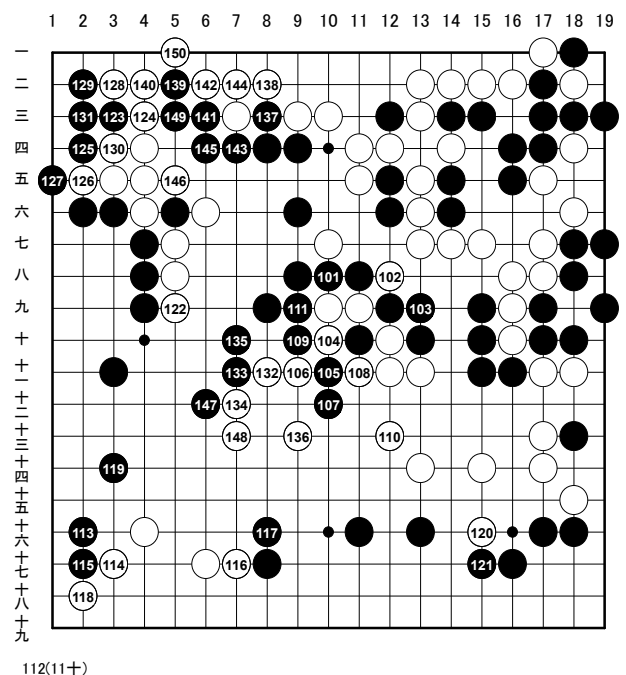
<第3譜 (101-150)>

黒も必死にシノギを図りますが、両方助けるのは無理で、白110まで中央右の黒7子が大きく飲み込まれてしまいました。この時点で白の優勢がはっきりしてきました。黒は113以下懸命に追いますが、黒129や黒139など左上辺に食い込んだものの、白も中央で白148まで黒の二目を取り込んで地を増やし、白がリードを守って終盤に入りました。

<第2譜 51-100>

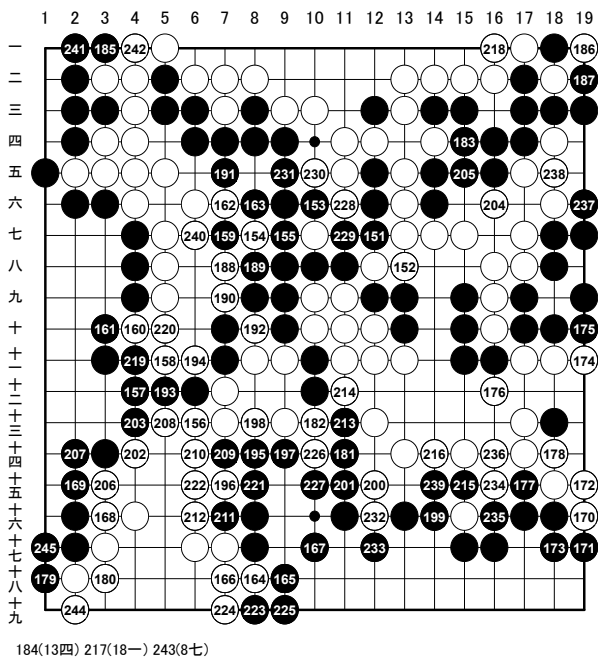


<第3譜 101-150>



112(11+)

＜第4譜 151-245＞



＜第4譜 (151-245) ＞

その後、ヨセが進みましたが、途中白188と目を奪い、白190のアテコミに黒191と上辺の黒の大石が生きなければならず、白192と二目を取られて白のリードが少し広がったかもしれません。最後は大きな波乱もなく245手で終局。白の21目半勝ち。

本局は、左上隅への黒の小ゲイマガカリ（黒13）に対し、白14のツケオサエから白がペースを掴み、上辺と右辺、右上隅の黒の弱石を攻めながらリードを奪って勝ち切った白の完勝譜でした。

今回も北海道医師会の皆様の暖かいご協力をいただき、とても充実した楽しいひと時を過ごすことができました。ありがとうございます。来年もさらに精進して良い内容の碁が打てるよう頑張りたいと思います。三宅会長、南田副会長を始めとする役員の皆様、上村先生には、いつも大変お世話になり誠にありがとうございました。

第42回本因坊戦
優勝記

旭川市医師会
あおぞらクリニック
菊地 一也



2年前から本大会に挑戦し、3回目で幸運にも恵まれ本因坊戦を優勝させていただき、とてもよい経験になりました。

デビュー時からいきなり名人戦に挑戦したのですが昨年は全敗を喫し、名人戦では実力的にまだ足りていないと痛感、今回は改めて本因坊戦へ初挑戦することにしました。

気負うとあまり良い結果が出ないタイプなので、優勝を目標にするのではなくなんとか入賞すること、そのくらいを目標にした方がいいと思い、当日試合に臨みました。その甲斐あってか、過去2回に比べてリラックスした気分で初戦を迎えることができました。

名人戦と違って段位差によるハンデ戦ですので、自分が上の段位のときこそ油断ができません。石を置かせた場合、上手のミスは数倍になって跳ね返ってくると聞いたことがあります。本因坊戦の場合そのあたりがどうか。

1回戦は互先（同じ段位者同士）の試合。握って白番があたって試合開始。自分は普段白黒どちらでも同じような成績です。ですから、リラックスしていた訳ですし、石を置かせているのでもありませんし、白番を苦にしていることもありませんし、まったく不安な材料はありませんでした。けれども、4回戦ったなかでもっとも苦しんだのがこの最初の碁でした。

戦っている間は、振り返っている暇などありませんでしたが、そういえば2年前の懇親会のように、名人戦を現在3年連続優勝している樋口栄作先生が最初の試合は難しいと言っていたのを思い出すのですが（その年の樋口先生の最初の相手がたまたま私だったこともあってそのような会話になった次第）、どういう訳で難しくなってしまうのでしょうか。ただ実際大苦戦でした。

もちろん相手も強かったのです。終盤に入ってやっとリードしたと思った矢先に、時間が少ないなかでミスをしてしまい、勝負に直結しそうな攻め合いになってしまいました。正しく打てばコウだったように思いますが、コウでフリカワってもこちらに残るかなどと考えている間にも時間がなくなるので、なかなかスリルがありました。

結局黒に思い違いがあったようで、コウにはならずあっさり攻め合いに勝ち、碁にも幸いしましたが、この1戦で本因坊戦もレベルが高く、なかなか骨

が折れると理解しました。

最初からものすごい洗礼を受けてへとへとになりながら、迎えた2回戦は相手の先番コミなし。またも攻め合いになりましたが落ち着いて処理。碁にも幸いました。

3回戦だけが2子置かせた碁で、前述のごとく上手のミスは数倍返しという話を信じている私としては、緊張感を伴う試合でした。置かせているのだからかなかりードを奪えずじっと耐え続けているうちに、相手に見損じがあって大石が頓死。そのあと勝負手とばかりに右辺に進入してこられました。活かしても勝てる状況になってしまっていたので紛れないようにあっさり活きを許して収束。この碁は順序を逆にして大石が死ぬ前に右辺に突入してこられていたら、その時点では本気で取りかけにいかねばならず、かなりきわどいことになったはず。取り損ねれば自陣に破綻をきたし、私の側が投了だったかもしれません。死んでから入ってこられたので、計算ができてしまいましたが、順序が反対でしたらこういう碁は結構な確率で負けるように思います。医者が言う通り誤解されそうですが、こと囲碁に関しては勝手に死んでくれるのは大変楽でありがたいものです。いっぽう自ら正面切って殺しにいかうものなら(囲碁の用語は物騒ですね)相手が暴れだすこと請け合いで、返り討ちに遭うなんて珍しくもないので、どうやら碁がわかってくるにしたがってさうさう気軽に殺しになんていけなくなるものようです。

最後は全勝者同士の戦いとなった4回戦。ここに至るまですでに2番ほど負けたような気分でしたから、素直に決勝の舞台に立てた幸運に感謝しながら臨みました。勝てば優勝という重要な碁でしたがとてもリラックスしていたのを覚えています。

私の先(黒番コミなし)で、序盤早々石が上に追いやられ、相手の棋風が地にカラいのかもしれないと分析しつつ、実は私も本来は地が欲しい向きなので少し困ったと感じていました。また流石に決勝の相手。かなりの打ち手だということが盤をはさんでひしひしと伝わってきます。さあどうしたものか。

中央を占めた黒の数が厚みとして働か攻撃目標になってしまうか、そこがこの碁のポイントと心得、地合のリードは白に許して手厚く打つ展開。ただこの碁はあまりにも構想どおりに事が運んだため、辛抱しているという感覚はありませんでした。中盤戦もたけなわ。思惑どおり先手を得た私はずっ

と狙っていた左辺を想像以上により形で分断。ついでに中央に横たわる数子とつながればよいと思っていたのですが、これが苦もなく実現してしまい、なおかつまだ先手だったので勢いにまかせて次の狙いに。アジつけしておいた右下スミを活きにかかれば、形成判断ができている相手はきっと眼を奪って追い出してくるだろうと考え実行。読みどおりに追い出して攻めたててきたので、こちらも用意していた筋で対抗し中央へ。大体思い描いたとおりにりましたが、中央につながる過程で白から鋭い技が一発飛んできました。正直見落としていた筋だったためにしばし手が止まってしまいました。結局私の碁力では全部の石を助ける手が見当たらず、枝葉の数子を捨てて妥協する以外に途はなさそうでした。読みがひとつ抜けてはいましたが、それ以外は左辺を分断して以降、大体構想どおりに進んで、部分的には予想以上によくなったところもあったので、勝っても負けてもこんな碁はなかなか打てないと感じました。

また、それこそ碁の奥深く面白いところで、もう少しよく読んでいけば却って怖くて右下スミを動き出せなかったかも知れず、そうであればなんの見せ場もないままこの碁を失っていたかもしれません。もっとしっかり読んでなおかつ勇気をもって必要な戦いができたとき、もう少し強くなれるのでしょう。…たぶん。

黒は左辺と右下スミから中央に石をつなげることで大きな集団になり、全体が安定したのが収穫。この時点で盤上に黒の不安な石がまったくなくなったのも好材料。いっぽう白は自然とあちらこちらに細かく分断。黒からはヨセに期待が持てる碁形で、まだ相手が若干地合ではリードしているものの十分に碁になったと判断していました。先手は相変わらず維持できていたし、流れは完全にこちらに向いていたと思います。そのためでしょうか。直後に白に痛恨の見落としがあり、黒の勝ちが定まりました。

決勝でいまの自分の実力を出し切れたのはよかったし、勢いに乗って手が伸びたのはとても幸運だったと思います。45歳にしてあらゆる競技をとおして初めての優勝。とても嬉しかったです。

末筆になりましたが、このような機会を与えてくれた三宅直樹会長をはじめとする幹事の先生方、毎年質問をぶつける私に、とても丁寧に教えてくださる上村収蔵先生。いつもスムーズな運営をなさっている医師会のスタッフの皆様、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

第42回大会成績表

【名人戦】

順位	氏名	得点
優勝	樋口栄作	34
準優勝	土屋潔	27
第1位	石川順一	26
第2位	南田英俊	25
第3位	石川雅嗣	24

【本因坊戦】

順位	氏名
優勝	菊地一也
準優勝	鈴木英軍
第1位	高畑勝彦
第2位	大泉和夫

(敬称略)